

シャルル・スワンの肖像 —『スワン家のほうへ』を中心に

清 家 浩*

克明なプルーストの評伝を読んで、例えば、彼が、1895年3月8日、「モンテスキュー邸に出かけ、グレフェール伯爵夫人やゲルス伯爵夫人やボトカ伯爵夫人に敬意を表した。バルテ嬢が館のあるじの詩を数篇朗読した。この夜の出席者には、ほかにもフランスやアースやホイッスラーやデュラフォワ医師のように、小説家のモデルとなる人たちがいた。」⁽¹⁾という記述に出会っても、そして、書簡が、「スワンの原型はシャルル・アース氏でした。大公たちと親しく、ジョッキー・クラブ会員のユダヤ人だったアースです。」⁽²⁾と述べたところで、作品『失われた時を求めて』に登場するスワンの役割の幾分かがわかる訳ではない。作者プルーストはシャルル・アースの人生の再現を目ざしてもいないし、ただ、作品世界の独自の法則に従って彼を生きさせているだけなのであるから。

プルーストの作品の重要な登場人物の一人シャルル・スワンは何者なのか。

現実の探求と内的な苦行、科学と宗教が果たしてきた二つの機能を合体させた稀有な例としてプルーストの作品を解釈するクロード＝エドモンド・マニーは、シャルル・スワンを、ヨルダン川でイエス・キリストに洗礼を与えるヨハネにたとえている。⁽³⁾ 作品中のスワンは、「らくだの毛ごろもを身にまとい、腰に皮の帯をしめ、いなごと野蜜を食物とする」荒野の苦行者のイメージからは程遠く、人々に罪のゆるしを得させる悔改めのバプテスマを施し、キリストの到来を告げる予言者の役も演じない。が、完成された作品を前にして、この作品は主人公＝話者が現実の試練の果てに芸術作品創造による救済に逢着する過程を示すものだと理解する時、マニ

* 広島経済大学経済学部教授

(1) ジャン＝イヴ・タディエ、『評伝プルースト 上』、吉川一義訳、筑摩書房、2001、p. 228.

(2) Ibid. pp. 427-428 の注における引用。

(3) Claude-Edmonde Magny, *Proust ou le romancier de la réclusion in Histoire du roman français depuis 1918*, Seuil, 1950, p. 152 以下。

一の評言の妥当性が理解されるのである。

社交生活、芸術愛好、嫉妬深い恋愛模様等、様々な点で、確かに、スワンと話者マルセルには共通点がある。しかし、マルセルが、最終的に、救済としての作品創造にたどりつかなければ、スワンを洗礼者ヨハネに擬することはできない。スワンは、あくまで、マニーも言うように、失敗したマルセル、救いを得られなかったマルセルであって、彼を逆証する存在でしかない⁽⁴⁾。逆に言えば、最終的啓示とその行為による実践が無ければ、マルセルもスワンと何ら変わるところはない。『わたしはキリストでなく、そのかたよりも先につかわされた者である。…彼は必ず栄え、わたしは衰える』（『ヨハネによる福音書』3, 28）と、ヨハネのごとくにスワンが言いうるのは、物語の出発点でなく、最終点においてだけなのである。

スワンが洗礼者ヨハネでありうるか否かは別にして、彼にまつわるエピソードが作品全体において、即ち、話者の人生のコースにおいて、前触れをなすことだけは事実である。第一編冒頭のコンブレの限られた話者の世界に最初に登場する外部の人間とは即ちスワンであったし、そもそも、第一編『スワン家のほうへ』は、ずばり、『シャルル・スワン』と題されてもかまわなかった⁽⁵⁾のである。

1. コンブレの隣人

話者マルセルとスワンの関係はどのように設定されるであろうか。

回想されるコンブレの話者は、大人達の会食のテーブルに着くことも許されず、早々に寝室に追いやられ、母のおやすみの接吻を待つ幼い子供である。彼とスワンの間には直接の関係はうち立てられるべくもなく、スワンは、ただその父の代から親交を続ける話者の家族の隣人でしかない。小さな庭の奥で、ためらいがちな鈴の音が2度響き、やがて、祖母につきそわれて闇に浮かぶ男の姿、外界からやって来る唯一の夜の訪問者としてスワンは登場する⁽⁶⁾。

話者は客人スワンと無縁で無関心であろうか。いや、それどころか。スワンの存在が一番重くのしかかっているのは、この男の子の上なのだ。客のいる食卓に彼は

(4) 《Swann est la contre-épreuve de Marcel, celui qui manque le salut.》 Ibid. p.152.

(5) Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, Ed. Pléiade, 4 vol. Tome I, P. 1050. 1913年7月付け、ルイ・ド・ロベール宛書簡の引用を参照。以後、作品からの引用はこの版による。なお、訳は、筑摩書房版「ブルースト全集」井上究一郎訳を参照しつつ拙訳した。

(6) 《Le monde se bornait habituellement à M. Swann qui ... était à peu près la seule personne qui vient chez nous à Combray, quelquefois pour dîner en voisin ...》 I. pp. 13-14.

同席できない。食事の途中で母が中座して、わが子に、いつもの習慣のおやすみのキスをしに2階に上がってくることは決してない。ところが、この接吻なしには、彼は安らかな眠りにつくことができない。スワンは、幼少の話者にとって、何よりも、この世でかけがえの無いものを奪いさる存在なのである。話者にこの不安を与える男スワンは、他方で、自らこの不安に苦悩した男でもあった。⁽⁷⁾

しかし、母を待ってベッドで転々とする話者に、どうして、スワンの苦悩がわかりえようか。ここには、プルーストの「私」の問題がからんでくる。時の経過の中で一瞬一瞬を生きている主人公の「私」と、過去を手中にしてそれを配列・構成して語っている語り手の「私」⁽⁸⁾。話者は単一ではないのである。愛する人が楽しんでいる場から自分が閉め出されているこの状況は、次の章『スワンの恋』で明きらかになる。したがって、記述の進行上、ここでは、話者マルセルが来たるべきスワンの苦悩を予告していることになる。が、時の流れに置いてみれば、話者が生まれる以前の『スワンの恋』に現われる苦悩が先に来て、『コンプレ』の話者にそれは引き継がれ、ジルベルトとの恋を経由して、後のアルベルチヌとの恋へとつながってゆくのである。

自ら意識せずしてスワンが話者に苦悩の洗礼を与えるこのエピソードが先ず最初に回想されるのは、ありえようもない事態、母が習慣を破って幼い話者に添い寝してくれた一夜の出来事があまりに強烈に話者の記憶に残っているからである。そして、「私」の失われた時を求める探求の出発点にあるこの夜の場面に現われる父は、「妻サラに息子イサクのそばから離れよと告げる」ベノッツォ・ゴッツォーリ描くところのアブラハムの姿をしている。この絵の複製はまさしくスワンが話者に与えたものであって、話者が先程まで味わっていた苦悩に関かわっていたのと同様、苦悩が至福に変わる瞬間にも、こうした形で、スワンが影を落とすのである。そもそも、イタリア旅行のたびに、スワンは、話者自身を喜ばすというより家人への慮りのせいであるにしても、傑作の写真を話者への土産に持ち帰っていたのであり、もう少し後の時期のコンプレの話者の部屋には、同じく、スワンのくれたジョットの

(7) 《Comme je l'ai appris plus tard, une angoisse semblable fut le tourment de longues années de sa vie.》I. p. 30.

(8) 三人称体の独立した物語の体裁をとる『スワンの恋』の中にも、この語り手の「私」は介入する。「数年後、彼がコンプレのわが家に夕食を取りに来る宵々、私自身が不安に駆られるのと同様に、云々」(I. p. 292)

(9) I. p. 36. Benozzo Gozzoli (1420-98) はイタリア初期ルネッサンス、フィレンツェ派の画家。

複製写真が飾られている。⁽¹⁰⁾さらに後、復活祭の休暇を北イタリアで過ごす可能性を前にして、少年マルセルの想像するフィレンツェは、フラ・アンジェリコの金地の背景に輝き、ヴェネチアはと言えば、直ちに、ジョルジョーネ、チチアーノに結びつくのである。⁽¹¹⁾このようにして、イタリア絵画の愛好家スワンの趣味は幼少期のマルセルに刻印されているのである。

話者マルセルの家族がスワンを迎え入れるのは別にスワンの人格を認めてのことではない。父親スワンと親交があれば《息子スワン》は自動的に家族の客人として迎え入れねばならない、というのが田舎のブルジョワ社会の掟である。年令の差にもかかわらず、話者の祖父がスワンと最も親しいとすれば、それは、祖父が《父親スワン》と最も親しく、又、彼を最も評価していたことの結果でしかない。『スワンの恋』の中でさりげなく書き込まれていることだが、この祖父は娘（即ちマルセルの母）の結婚式にスワンを招待してもいたのである（I. p. 305）。勿論、それは、話者一家にとどまる態度ではなく、スワン個人を知らなくとも、彼を故スワン氏の正当な跡継ぎとみなす人々は彼に礼儀をつくしていた。他方、スワンの方でも、オデットとの結婚以前は、上流貴族の招待状よりも両親の旧友からの結婚式への招待とか証人になってほしいとの依頼の方をよっぽど好ましく感じていた（Ibid.）。彼は、《息子スワン》として、株式仲買人の《父親スワン》と同様のカーストに属しているのである。父の交友関係、父の価値観、それは直ちにスワンのそれであるはずであった。家人に届け物をする、イタリア旅行のたびに子供に傑作の写真を渡す、そんなことは当然の行為として、わざわざ感謝するほどのものでもない。が、彼が高等娼婦とみなされる女と結婚することは、カーストからの逸脱として、絶交の理由となる。あるいは絵画に熱中して素晴らしいコレクションの所有者となろうが、政府高官や大貴族との親交を誇ろうが、それらは、カーストの域を踏みはずしている以上、コンプレのブルジョワ社会では、彼の評価を貶める要因でしかない。せいぜいが無視されるだけのことである。話者マルセルの切実な不安を除けば、彼の存在に注意を払う人はいないのである。

ところで、ここに、祖父が何度となくくり返す《父親スワン》に関する奇妙なエピソードがある。⁽¹²⁾看病の甲斐なく他界した妻の葬儀の日、悲嘆に沈む彼が庭先で一

(10) I. p. 80. Giotto (1266頃-1337) イタリアルネッサンス美術の先駆者。

(11) I. p. 379. 及び p. 384. Fra Angelico (1400頃-1455) イタリア、フィレンツェ派の画家。Giorgione (1477頃-1510) イタリアルネッサンス期ベネチア派の画家。Tiziano (1490頃-1576) ベネチア派絵画を大成したイタリア盛期ルネッサンスの画家。

瞬場違いな喜びを爆発させるシーンである。「こんな良い天気と一緒に散歩できるなんて何という幸福でしょう。美しいと思いませんか。この木々、このさんざし、私の池……」(I. p. 15) 祖父がわざわざ納官の場を見せないように部屋から連れ出した涙にかきくれる人物の突然の幸福感。勿論、作品構成の観点から言えば、これは、「心の間歇」*intermittence du coeur* の最初の表示であって、ここでは、悲しみの中であって、すでに、いつか復活するに違いない生きる喜びを背負った自我が顔を出しているにすぎないが、後の『スワンの恋』で、さらに先、話者の二度目のバルベック滞在でも示されるように、人は現在の感情に全的に支配されるものではないことを示す例なのである。

悲嘆と歓喜の相反する感情を同時に味わうことの不可解さに、『父親スワン』は、「片手を額にやり、目と鼻メガネのレンズをぬぐう仕草」をすることしかできない。これは、後に『息子スワン』が困難な状況に陥るたびにしてみせる仕草でもあって、作品の重要なテーマ（間歇性）と一族の具体的かつ遺伝的動作（無能のモチーフ）を父は息子に先立って予示していることになる。

ところで、カーストの枠にはめられ、一見無個性なコンプレの『息子スワン』の生活の隠れた部分が時折現われてくることがある。夜会服のままやってきたのは、さる大公夫人邸で夕食を取ったからだ、と御者が洩らした夜 (I. p. 18) とか、祖父の読む新聞に「X 公爵家の日曜日の午後の常連」と紹介されていたり (I. pp. 20-21)、コロ展の展示作品と共に、所蔵者スワンの名が示される『フィガロ』紙の記事 (I. p. 22) 等々。コンプレでは影の薄い『息子スワン』は、実は、ジョッキー・クラブの最も粋なメンバー、パリ伯爵、プリンス・オブ・ウェールズの親友、フォーブール・サン＝ジェルマンの上流社交界の寵児であって (I. p. 15)、コンプレのブルジョワ社会が知らないだけで、彼自身は、株式仲買人たるカーストをとっくに離脱した存在であった。

彼がいかにしてこの社交的地位を築いていったか、それは説明されない。また、それは必要のないことであろう。というのも、コンプレの一ブルジョワの息子、話者マルセルが、祖母の女学校時代の友人ヴィルパリジ侯爵夫人とのバルベックホテルでの偶然の再会、特に、その甥、ロベール・ド・サン＝ルーとの友情を通して、ゲルマント家と親交を結び、貴族社会に深く浸透していく、後に語られる過程は、まさしく、スワンがたどったコースと同じだろうと想像されるからである。

(12) 《J'entendais plusieurs fois par an mon grand-père raconter à table des anecdotes toujours les mêmes sur l'attitude qu' avait eue M. Swann le père ...》I. p. 14.

ゲルマントの一員であるヴィルパリジ侯爵夫人は、話者の祖母にこうたずねたことがあった。「スワンさんをよくご存知なのでしょう。ローム家の私の甥達の親友の。」(I. p. 20) ローム大公とは、父の死後、跡を継いでゲルマント公爵となる人物であり、その弟はシャルリュス男爵であって、後の上流社交界における話者マルセルの後ろ楯となる人達である。そう考えれば、話者はスワンの地位の後継者であって、スワンは話者の先行者である。

ところで、スワンの上昇の鍵を握る人物はシャルリュスであろう。コンブレのスワン邸に姿を見せ、人々の憤慨的であったシャルリュスは、スワンから見て、妻の看視役としては最も信頼のおける男性であった。実際、ブルーストがアンリ・ゲオンに宛てた書簡の説明によれば、中学校時代 (au collège), シャルリュスはスワンに恋していて、彼がオデットの愛人になることは万に一つもない同性愛者であることを、スワンは承知していたのである。⁽¹³⁾ スワンの要請に応じて、彼への愛情からシャルリュスがオデットの相手をするのであれば、それ以前、スワンのフォーブール・サン＝ジェルマンへの参入の後押しを、彼の要請に応じて、シャルリュスがしなかったはずはない。自分が愛した芸術家肌の株式仲買人の息子が、自分のおかげで、社交界で大貴族のようにふるまう、それは、バルザック愛好家シャルリュスを大いに魅了した筋書きであるに違いなかった。話者マルセルはシャルリュスのアプローチに答えることはしない。⁽¹⁴⁾ が、官房長官の息子マルセルとゲルマントの一員、シャルリュスの甥サン＝ルー侯爵のカップルは、スワンとシャルリュスのカップルの軌跡を再現するかのようである。

愛着を捨てきれずに訪れるコンブレにおける《息子スワン》は、言わば、仮りの姿であるのだが、この田舎のブルジョワ社会から最も遠い《ジョッキー・クラブのスワン》こそは、遠い先の話者マルセルの遍歴を予示するのである。

2. スワン対ルグランダン

コンブレにあって、洗礼者ヨハネとまではいかなくとも、マルセルを導く存在は、

(13) 《(Mon grand-père murmurait:) Ce pauvre Swann, quel rôle ils lui font jouer: on le fait partir pour qu'elle reste seule avec son Charlus, car c'est lui, je l'ai reconnu!》I. p. 140.

(14) 《... M. de Charlus est un vieil homosexuel qui remplira presque le troisième volume et Swann dont il a été amoureux au collège sait qu'il ne risque rien en lui confiant Odette.》I. p. 1166. の注における引用。

(15) ヴィルパリジ夫人は話者に聞いている。《Est-ce que vous êtes le fils du directeur au ministère?》II. p. 61.

スワンのみに限られるであろうか。ブルジョワの身分であって、時に、パリからコンブレに帰ってくる人物は、スワンの他にルグランダンがいる。が、相似た境遇にあって、芸術愛好の共通点を持ちながら、これほど対照的な存在もない。

では、はたして、ルグランダンとはどんな人物なのか。

スワンが何よりもまず、庭木戸の鈴の音と夕闇をバックにおずおずと現われる控え目な影の男とすれば、ルグランダンは、何より、日曜の昼下がり、教会のミサの終り頃、昼の光の中に、蝶むすびのネクタイをひらひらさせて現われる人物である。技師という職業故に、彼は週末にしかコンブレには帰ってこないのだが、「背が高く、立派な風采の、物思わしげなほっそりした顔立ちには長いブロンドの口ひげと青い憂愁をたたえた目を備え、洗練された物腰の持主、かつて聞いたことがないほどの巧みな話し上手で」(I. p. 67)、話者の家族から見れば、お手本にすべきエリート⁽¹⁶⁾の典型なのであった。一体、スワンの外貌がこれだけの精彩をもって描かれていたであろうか。「プレッサン風に刈りあげた、ほとんど赤茶に近いブロンドの髪の広い額の下、わし鼻で緑の目をしたその顔立ち」は、宵闇のせいで見分けもつかないのであった (I. p. 14)。

幼少の話者の「就寝の悲劇」において、苦悩を引き起こす原因でしかなく、その後、話者が休暇で過ごすコンブレにおいても直接の交渉があるようには見えなかったスワンに比して、ルグランダンは、少年マルセルを自宅での夕食に招く程に親密である。「老人の友達の相手をしにきて下さい。われわれにはもはや帰るすべもない国から旅人が送ってくれる花束のように、あなたの少年期からは遠く離れた私に、私も又はるかな昔に過ごした幾多の春のあの花々の香りを吸わせて下さい。」寡黙で自分の意見は差し控えるスワンに対して、ルグランダンは常に饒舌で、語彙は多彩で、詩的言葉をあやつって巧みに話す。が、それもそのはずで、話者一家が当時知らなかっただけで、彼は作家として一定の評判を得ていたし、さる有名な作曲家が彼の詩に曲をつけてさえいたのである (I. p. 66)。確かに、彼は文学的素養を持っていた。が、スワンと違って、彼があまりに文学的に、術学的に、そうした素養をひけらかすとすれば、それは、彼が芸術からは程遠いエンジニアという職にあったからでもある。自分の今の生活は本来の自分の在り方に合っていないという意識が彼の会話の背後にある。自分の職業では全く活かすことのできない芸術の要素で彼は会話を飾り立てるのである。

(16) 引用に続いて、さらに、《Venez avec la primevère, la barbe de chanoine, le bassin d'or, venez avec le sédum ...》と美文調は延々と続く (I. p. 124)。たかが、知り合いの一少年を夕食に招くくらいで。

中年のルグランダンが少年マルセルと対等に接し、子供扱いしないのは、一種の気取り、少年を眩惑したい虚栄心の現われなのであろうか。否、そういう風には思われない。ある日、家族と共にミサから帰る話者に彼が投げかける言葉。「あなたは美しい魂の持主だ、まれな美点、芸術家の天性をお持ちだ。その大切なものをなおざりにされないように。」(I. p. 67) かくして、彼が年少の友のうちに自分と同じ素質を見出し、それに共感し、育んでいこうという意志を持つのであれば、話者を導いていく人物としては、スワンよりも、ルグランダンの方がはるかに適役なのではなかろうか。むしろ、彼の方が洗礼者にふさわしい。

このルグランダンとスワンが狭小なコンブレで顔を合わすことはない。話者一家がルグランダンに会う日曜日の教会に、ユダヤ人であるスワンが姿を見せることは、絶対にありえないことだからである。したがって、例えば、教会に姿を見せる貴族階級に対する両者の態度を同時に比較しうる場面はない。

あれほど華やかな社交人であったスワンは、まるでお忍びでやってきたかのように、コンブレでは、《息子スワン》の立場に徹していた。そして、仮に、スワンが、話者家族の面々と連れだっている時、コンブレの住人が想像だにつかない、スワンと親しい貴顕の人物に出会うことがあったとしても、彼はコンブレの旧知の人々のかたわらに留まって、相手が気を悪くすることなどお構いなしに、敢えて彼らにあいさつをしなかったろう⁽¹⁷⁾。

ところで、近在の城主の奥方（つまりは貴族の女性ということだが）と教会を出てきた時のルグランダンの振舞はどうだったであろうか。話者の父が送った親しみと慎みをこめたあいさつに対して、彼は、話者一家をまるで知らないかのように、驚いた様子をしてだけで敢えてあいさつを返さない (I. p. 118)。女城主と一緒にいるところを目撃されるのは何かまずい事情があるのか、それとも、彼は話者の家族に何か腹を立てているのか、それとも、何かに気を取られて彼らだと気づかなかったのか。翌日、散歩の帰りに出会ったルグランダンは愛想良く握手しに来るのであるから、彼らに腹を立てているとは思われない。が、その日に続く日曜日、再び話者一家と教会前ですれ違うルグランダンの、あいさつとは言えないあいさつで事は判明する。女城主と一緒にいる彼は、連れの女性にはそれとわからせず、話者一家には友情のあかしを伝えたい、苦しまぎれのほんの目くばせだけのあいさつを送ってよこすのである (I. p. 124)。差し向いの時は実に愛想のいい男が、貴族階級という時

(17) 《... mais il y avait fort à parier que ces gens inconnus de nous qu'il voyait, étaient de ceux qu'il n'avait pas osé saluer si, étant avec nous, il les avait rencontrés.》 I. p. 16.

には、自分の卑しいブルジョアとの交際をひた隠しに隠しておきたいのである。ルグランダンの城主へのへりくだりようはどうだったであろう。「あの素早い身のこなしは、私がこれほど肉づきが良いとは思っていなかったルグランダンの尻を一種の激越な筋肉の波の中に逆流させ、そして、なぜかはわからぬが、この純粋に物質的なうねり、精神性のかげらとてなく、卑屈さにみちた慇懃さが嵐となって打ちつこの完全な肉の波は、突如、私の頭の中に、われわれが知るルグランダンとは全く異なるルグランダンがいるかもしれぬという思いを目ざめさせた⁽¹⁸⁾。」彼は上の身分に取り入ろうと、いそいそと、また恍惚として立ちまわる機械仕掛けの人形になってしまうのである。

これは、あの趣味の良いスワンなら決して取りえない態度である。ルグランダンは、自らが口を極めて非難するスノップそのものだったのである。真実や友情より上に上流社交界を置き、そこに迎え入れられんと躍起になる人物が、真理への道を歩む話者マルセルの導き手となることはありえないことである。

ルグランダンのスノビズムはさらにどんなエピソードを生むであろうか。

コンプレの美しい夕刻、ルグランダンは、ノルマンディーとブルターニュの間に位置するバルベックとその周辺の美しさを散歩途中の話者家族に語り始める。夕刻の美しさのみにとどまらず、彼のバルベック讃歌は、アナトール・フランスが巧みに描写した、永遠の霧に閉ざされた地の果てのイメージにまで広がっていく (I. p. 129)。アナトール・フランスは少年マルセルが是非読むべき作家であり、バルベックは是非訪れるべき土地とされるのである。ところで、話者の家では、マルセルと祖母をバルベックへバカンス旅行に送り出そうという計画があった。父はこれほど土地に詳しいルグランダンに、知り合いでもいるのか、と質問する。しつこくくり返される質問への苦しまぎれの返答はこうである。「あちらでも他のどんな場所でも、私は誰とも知り合いですし、誰とも知り合いではありません。物はよく知っていますが、人間はほとんど知りません。」 (I. p. 130) 現実には、バルベックのすぐそば、2 km ほど離れたところに彼の妹が住んでいるのである。但し、ルグランダン嬢はかの地でカンブルメール侯爵夫人となっている。上流社交界への参入を渴

(18) 《Ce redressement rapide fit refluer en une sorte d'onde fouguese et musclée la croupe de Legrandin que je ne supposais pas si charnue; et je ne sais pas pourquoi cette ondulation de pure matière, ce flot tout charnel, sans expression de spiritualité et qu'un empressement plein de bassesse fouettait en tempête, éveillèrent tout d'un coup dans mon esprit la possibilité d'un Legrandin tout différent de celui que nous connaissions.》 I. p. 123.

望し、かつ、自ら得た特権が他には許されないことを願うのがスノップであるからには、ルグランタンは、ブルジョワの友人を貴族の一員たる妹に、金輪際、紹介しようとは思わないのである。話者の父に追いつめられた彼は、先ほどの熱弁とはなはだしく矛盾することなど全くお構いなしに話の道筋をゆがめ、「この真実のない地方、純粹にフィクションのこの地方は、少年にとっては悪書のようなものです。私の年少の友に私が選び推薦するのは、確かに、この土地ではありません。」と逃げつつ、「バルベックはおやめなさい。50才までは。」(Ibid.)と結論づけるのである。

こうしたやりとりは、後に、作品中で、何度か変奏されることになるが、一例をあげておくなら、第三編『ゲルマントの方』を閉じる「公爵夫人の赤い靴」のエピソードが恰好のものであろう。

話者と余命3、4ヶ月のスワンはゲルマント公爵邸で顔を合わせる⁽¹⁹⁾が、公爵は先ず、話者が公爵の兄たるゲルマント大公の夜会に招待されているのかどうか照会することを断り、同時に、一筆紹介状を書くことも断る (II. p. 864)。ついで、招待の晩餐に出るよりも死に近い友人のそばにいた方が大切ではなかろうかと逡巡する夫人に、8時きっかりに食卓につく必要性を思い出させる。時間は8時10分前。急がねばならない。しかし、夫人が赤いドレスに黒い靴をはいているのに気づくと、はきかえるように命じて、「時間はたっぷりある。まだ10分前だ。……それに、8時半になっても彼らは待ってくれるだろう。」と大声をあげるのである (II. pp. 883-884)。

かくして、友情と誠意をかえりみず、己れの野心と欲望のために平気で嘘をつけるスノップと社交人のグループ、その先駆けとなるのがルグランタンである。話者マルセルに対してスワンと同じ立場にあって、家人からスワン以上の評価を得ながら、彼は、マルセルが進む同じ道の上に立つものではなかった。スノビズムが無ければ、あるいは、彼はスワンたりえたかもしれない。ルグランタンはスノビズムに捉えられたスワンと言えなくもないのである。『スワンの恋』の終末部で、オデットへの愛の軛から解放されて、スワンが最初に会いに行く女性がカンブルメール侯

(19) 亡くなった母親の年令に達したスワンは、母を奪った同じ病気に苦しんでいる。ドレフュス事件でユダヤ人のアイデンティティーに目覚め、社会をドレフュス派と反ドレフュス派の観点からしか見られなくなったスワンが、なぜか、ヨハネ騎士団の流れを汲むマルタ騎士団研究の校正刷りと、自らがロードス島で発見した騎士団のコインの巨大な写真を持って、ゲルマント公爵夫人に会いに来ているのである。

爵夫人、旧ルグランデン嬢であるという事実は (I. p. 374)、コンブレの二人の対照的な男が互いの分身であって、兄弟であることを秘かに象徴するかのようである。

3. ディレッタント、スワン

スワンの芸術愛好

あの遠いコンブレの宵々で、時に、祖母の妹が歌を披露する時、ピアノの譜めくりをするのがスワンであってみれば (I. p. 18)、彼には音楽の素養もまた備わっていることが知れる。フォーブール・サン＝ジェルマンの幾多のコンサートで洗練の度を高めていったろうと想像もつく。そして、文学に関しても、少年マルセルが熱愛する作家ベルゴットを誰よりもよく知っているのがスワンであった。自分の交際をひけらかすことのないスワンが例外的に語るところによると、ベルゴットは毎週彼の家へ夕食に来るし、娘ジルベルトとは無二の親友ということであった (I. p. 98)。話者に女優ラ・ベルマの『フェードル』か『ル・シッド』を是非観るべきだと勧めるのもスワンであった (I. p. 96)。スワンの芸術愛好は、前述したようなイタリア絵画にとどまるものではなく、様々なジャンルにひろがっている。とは言え、彼に最も浸透しているのは絵画への趣味であって、それは、現実の人間と絵画に表現された人物との類似を発見する彼のくせとして、コンスタントに示されている。例えば、話者とベルゴットの話しをする先ほどの場面でも、話者に初めてベルゴットを教えた級友ブロックのことを、「ベリーニのマホメット三世の肖像にとってもよく似た少年ですね。同じへの字眉、同じ鉤鼻、同じ張り出した頬骨。」 (I. p. 96) そして、自ら贈った、話者の部屋に飾ってあったジョットの「慈愛」の複製の女性像と話者一家の台所に入出入りする下働きの女との間に類似点を発見して、スワンは話者に「ジョットの慈愛は元気ですか」とたずねたりするのである (I. p. 80)。ただ、付言しておく、コンブレの話者の家族はスワンの芸術的感性を全く評価せず、例のカースト的偏見から、せいぜい彼を変わり者とみなしていた。唯一祖母のみがスワンの趣味に全幅の信頼を置いていて、孫に芸術性のあるプレゼントを贈る際にはスワンに意見を聞くのが常ではあったが。

確かに、ルグランデンと違って、スワンが自己の胸中を美しく吐露することはない。祖母の妹達が、ある絵に関して、スワンに感想を言わせようとしても、彼は、

(20) スワンは話者に読書中の作品の扉にサインをしてもらってあげようと提案する (I. p. 96)。又、後に、彼はベルゴットとの昼食に招待されることになる (I. p. 536)。拒むルグランデンと与えるスワンの差が見られる。

失礼なほどに沈黙を守り、その絵のある美術館とか、制作年代とか、外的な知識を披瀝するにとどめている。コンブレの一時期の話者には、それは、パリ風のエレガンスに見えていたものだが、ベルゴットを読む年頃になると彼の態度に反発を感じないではいられない。「他のどんな生活において、彼はついに、事物について思うところを真面目に語るのであろうか⁽²¹⁾」と。しかし、スワンはなぜ頑なに自己の個人的感想をもらさないのであるか。それは、彼が社交界で得た一個のスタイルなのであるか。いや、そうではない。その説明は、話者誕生以前のスワンの恋の物語中に与えられている。

彼は「理想の目的」*but idéal* をあきらめ、日々の満足に甘んじ、もやは、己れの精神のうちに「高遠な理想」*idées élevées* が訪れるのを感じない。その実在を信じることさえやめている (I. p. 207)。それは、逆に、スワンがかつてはこうしたものを信じていた証であるが、このあきらめの結果、スワンは事の本質に触れないですむ無意味な思考に逃避するか、会話では、決して事物に関する内心の意見を表明しないで、細部の情報のみを提供する習慣に染まっていたのである。だからこそ、コンブレでも示される通りに、料理のレシピや画家の生年、没年、作品目録といったものに非常にくわしかったのである。時に、本質に触れる言葉を発すると、それが真面目に受け取られるのを恐れるかのように、あわてて皮肉な調子をつけ加えてごまかすのであった。したがって、彼の沈黙に社交的な意味合いは含まれていない。むしろ、彼の精神の誠実さの現われと取るべき性格のものである。彼には精神世界の富をめざす時期があった。それを放棄するのであれば、きっぱりと、そこから手を切る、コンプレックスの結果とはいえ、そこには一種のストイシズムさえ感じられる。ルグランダンのように、あるいは、ローム大公夫人ことゲルマント公爵夫人オリヤヌのように、ことごとに、己れの一見独創的見解を人にひけらかそうと思えば、教養人のスワンには、そんなことは安々と、やってのけられたはずなのである。

スワンのこの態度は自らに課したものなのである。そして、巨匠の絵の中に現実の誰かの顔立ちを認める彼のくせについてもこれと同じことが言えるであろう。

では、画布の上に定着され永遠化された形姿の上に、移ろいゆく束の間の個人の顔を重ねるとはどういうことか。『スワンの恋』で与えられる解釈の第一は、「許し」である。社交界の寵児でありながら、己れの生を社交にしか捧げないことに常に悔

(21) 《Pour quelle autre vie réservait-il de dire enfin sérieusement ce qu'il pensait des choses ...》I. p. 97.

恨の情を持つスワンは、かつて巨匠が関心を持ち絵画化した顔と同じ顔を身近な現実に発見することで、彼ら大芸術家から一種寛大な許しを得た気分になるのである。⁽²²⁾二番目に、古い作品の人物に現在の人物の先取りを見、現在の人物に過去の作品の人物の魅りを見ないではいられないのは、スワンが社交界の軽薄さを身につけたせいだとされるが、第三の可能性としては、類似を通して、個別の特徴がより一般的性格を帯びるのを見てスワンが喜びを感じるのだとすれば、それは、彼が芸術家の素質を有しているからだとも解釈される。スワンのくせは、「彼にはそんなくせがあった」という単なる一個の事実にとどまらない。このくせの背後には、かくして、創造と無為の葛藤がひそんでいる。ここに暗示されるのは、一度は芸術家をめざした人間が社交界の虚無に埋没する姿である。

第1部『コンプレ』では明きらかでなかったスワンの一面が、第2部『スワンの恋』の中で明きらかになる。話者の誕生以前、話者がたどるであろう芸術の道を、あのスワンもたどっていたのだ。二人の間に共通するのは、「就寝の悲劇」で示された、愛する人が自分から奪われている苦悩のみではなかった。スワンが「失敗したマルセル」であることを理解させる鍵はここにある。

小楽節とスワン

スワンは社交生活に埋没して、二度と、芸術の道の方へもどることはなかったのであろうか。

一個の愛の過程を描く『スワンの恋』は、他方で、スワンの芸術による救済の可能性の提示と喪失を語る物語でもある。

確かに、スワンは、フォーブール・サン＝ジェンルマンで大貴族のごとくふるまいつつ、無為のうちに芸術的才能を涸渇させつつある。オデットには今仕事で忙しくてと言いつつ、その実、何年も放棄したままの、フェルメールに関する研究はその象徴である (I. p. 195)。彼はフェルメールの与える感動の内実を究めようとしていたに違いない。が、彼の感動も探究心も長続きしなかったのである。ところが、復活のきっかけが楽曲の形で突然訪れる。オデットが初めてスワンをヴェルデュラン家のサロンへ連れて行った時のことである。しかし、実は、スワンが忘れ去ってただけで、救いの可能性はその前年にもたらされていた。彼がある夜会で聞

(22) 《Peut-être ayant toujours gardé un remords d'avoir borné sa vie aux relations mondaines, à la conversation, croyait-il trouver une sorte d'indulgent pardon à lui accordé par les grands artistes.》I. p. 219.

いたピアノとヴァイオリンの曲が、かつて経験したことのない深い感動を彼に与えていたのである。一人になったスワンがこの楽節の思い出の中に見出すのは、「信じることをやめていたあの目に見えない現実のひとつの現存」⁽²³⁾であって、まるで、音楽が彼の「精神の涸渇」*la sécheresse morale* に親和的な影響を与えたかのように、この現実に関心する自分の生涯をささげたいという欲望と力が再び彼のうちによみがえるのである。フェルメールの絵も同種の作用をスワンに及ぼしたに違いないが⁽²⁴⁾、それが忘れ去られたのと同様、彼は、この楽節のいざないを胸に保っておくことができなかつたのである。

留意しておくべきは、スワンが音楽による感動に促されて初めて芸術へ関心に向けるのではない、ということである。スワンは本来「目に見えない現実」（それは芸術が示すものだ）を表現すべき使命を感じていた。あきらめて捨てさっていたこの使命を音楽は再び意識化させたのである。この音楽による促しも忘れさられた。しかし、思いがけなく、パリのブルジョワ女のサロンで、スワンはこの楽節に再会することになるのである。それは、ヴァントイユの「ピアノとヴァイオリンのためのソナタ」であった。

ソナタの小楽節は大きな幸福感に包まれた安らぎと復活をスワンにもたらす。しかも、曲の身元が知れた以上、いつでも、好きな時にその魅力を味わいつくすことができるのだ。ところが、小楽節は、社交生活によって失われていた青年期の靈感を再生させる一方で、オデットへの恋愛感情に強く結びつく。ヴェルデュラン邸では、ピアニストが二人のためにソナタの小楽節を演奏する。オデットの部屋ではスワンが彼女にピアノで弾かせる。小楽節は二人の「愛の国歌」*l'air national de l'amour* となって、スワンを内面への沈潜へ向かわせるかわりに、言わば、スワンの外側に存在し続けることによって、彼の魂の復活を促すというよりも二人の恋の幸福を象徴するものになってしまうのである。その結果オデットのスワンへの愛が冷めるにつれて、再び、「目に見えない現実」への道は閉ざされていくだろう。が、しかし、もう一度だけ、サン＝トゥーヴェルト邸の夜会で、ヴァントイユの音楽はスワンに呼びかけることになる。絶望のうちにあるスワンは、曲の根底にひそむ苦悩の深さを、恋の幸福が去った今、十分に理解する。「どのような苦悩の底から、

(23) 《la présence d'une de ces réalités invisibles auxquelles il avait cessé de croire》I. p. 207.

(24) フェルメールの絵がスワンに伝えたものは、ベルゴットが見る『デルフト風景』に具現化されるであろう (III. p. 692)。又、音楽体験以後に、スワンがフェルメール研究を再開していたことも一応注目しておこう (《Maintenant qu'il s'était remis à son étude sur Ver Meer ...》I. p. 347)。

彼（ヴァントイユ）はこの神のような力、この創造の無限の力を引き出したのか。」
(I. p. 342)

3度の機会を通して、スワンは、ソナタが含むメッセージと「目に見えない現実」の相を完璧に理解したと言いうる。が、それにならって、自己を表現者に変えるには至らず、苦しい恋の桎梏から解放されるや、又、元の繊細な美術愛好家に過ぎない一個の社交人にもどってゆくのである。

しかし、「貴族社会のほとんどすべての女性を知りつくした」(I. p. 188)とされる女好きのスワンが、なぜ、素姓もあやしい高等娼婦もどきオデットに翻弄されねばならなかったのであろう。

彼は、自分の好きな画家が描いた女性の深い表情や憂愁をたたえた顔立ちを讚美していたが、現実には、健康で豊満なバラ色の肉体の方が好きだった。オデットは彼の好みの女性でさえなく、初期においては、彼女と落ち合う前に必ず、ふっくらしたみずみずしいお針子に会わずにはいられなかったのである (I. p. 214)。

彼の行動ががらりと変わるのは、オデットの部屋への二度目の訪問からである。スワンはこの時、オデットとボッティチェリが描いたイェテロの娘「セフォラ」が瓜二つであることに気づく。やつれた重々しい憂愁をたたえたこの種の美がスワンの欲望をかきたてることは無かったはずだが、今や、この類似は、スワンがオデットを熱愛する契機となるのである。

なぜなのであろうか。以前は、絵画の人物と現実の人間の間に類似を見出すことは、彼が芸術への道からはずれることへの代償行為であった。この癖と芸術の本質とは全く無関係であった。が、ヴァントイユのソナタに感化されて以来、彼は、芸術家スワンの幾分かをとりもどしていた。「彼がしばらく前から得ていた数多くの印象は、むしろ音楽への愛と共に生じたのであったが、彼の絵画の趣味を豊かにしたがために、この瞬間に彼がオデットと「セフォラ」の間の類似に見出した喜びはより深く、スワンに永続的な影響を及ぼすことになるに違いなかった」。⁽²⁶⁾オデットが「セフォラ」に似ているという言い方は十分ではない。オデットは「セフォラ」

⁽²⁵⁾ 《Elle était apparue à Swann non pas certes sans beauté mais d'un genre de beauté qui lui était indifférent ...》I. pp. 192–193.

⁽²⁶⁾ 《... parce que la plénitude d'impressions qu'il avait depuis quelque temps, et bien qu'elle lui fût venue plutôt avec l'amour de la musique, avait enrichi même son goût pour la peinture, le plaisir fût plus profond, et devait exercer sur Swann une influence durable, qu'il trouva à ce moment-là dans la ressemblance d'Odette avec la Zéphora ...》I. p. 220.

になったのである。小楽節を再び聞いて以来、芸術家たらんとするかつての意欲を内心に復活させたスワンは、「セフォラ」となったオデットの中に恋と芸術の合体を見たのである。二人の愛の国歌、ソナタの小楽節と机の上のイエテロの娘の複製は、芸術による救済の可能性を告げる小道具である。しかし、精神的・肉体的にこれ程強くオデットに執着することが、一方で、スワンの激しい不安と嫉妬の苦悩を生み出してゆく。あれほど多くの女性を安々とものにしたスワンが、唯一、最大の苦悩を味わった恋は、精神の涸渇からスワンを救い出す芸術家魂の再生が無かったなら、他の情事と何ら変わるところはなかったであろう。

『スワンの恋』の末尾、「生涯の何年かを台無しにしてしまったなんて、死のうとまで思ったなんて、一番大きな恋をしたなんて、自分の気に入りもせず、好みのタイプでもなかった女のために。」と、苦しい愛の軛から解放されてスワンがつぶやく時、同時に、彼は、「目に見えない現実」への道を完全に放棄したと告白したも同然なのである。

ディレッタントと芸術家

若い頃は自らを芸術家と信じていたスワンが芸術創造⁽²⁸⁾へ向うことはついになかった。ヴァントイユの音楽が差し出すあらゆる富を理解した時でさえ、スワンの口をついて出る言葉は、「おお、恐らく、ラヴォワジエやアンペールの大胆さにも匹敵する天才的な大胆さ」(I. p. 345)程度のものであって、そして、愛の苦悩から解放されると、創造の努力へ向う気構えも同時に消えてしまうのである。

コンブレの話者の前に現われる以前のスワンは、こうした過程を生きてきた人物であった。イタリア絵画愛好家の社交人スワンは挫折した芸術家の一面を持っていたのである。ゲルマントの方の散歩で、いつか作家になることを誓い、同時に、無能感にさいなまれる少年マルセルは、スワンと同じ種類の人間であると言ってよい。その意味で、スワンはマルセルの先行者である。が、失敗した者であって、話者を導く資格はないであろう。イニシエーションを与えるのは、スワンにとってのヴァントイユのごとくに、実際に自己を実現した者でなければならない。ディレッタント、スワンから真の芸術家へ役割は交代してゆくはずである。

(27) 《Dire que j'ai gâché des années de ma vie, que j'ai voulu mourir, que j'ai eu mon plus grand amour, pour une femme qui ne me plaisait pas, qui n'était pas mon genre!》I. p. 375.

(28) 《... adolescent, il se croyait artiste》I. p. 235.

作家ベルゴット、画家エルスチール、作曲家ヴァントイユ。三人の芸術家はすでに、『スワンの家のほうへ』で姿を現わす人物達である。スワンをあれほど感動させたソナタの作曲者ヴァントイユは、スワン同様、コンブレの人であったが、スワンは作曲者とコンブレの住人が同一人物とは思えない⁽²⁹⁾。彼と同じ名前の彼の親戚と思われる人物について知りたいと思って、親しくもない、ましてや、場ちがいな結婚をしたという理由でスワンを避けていたヴァントイユに、愛想良く、お嬢さんをよこしてほしいとスワンが頼む『コンブレ』の場面 (I. p. 148) は、後の『スワンの恋』への伏線だが、時を経た後も、いまだに、スワンが小楽節の思い出を抱いていることの証拠でもある。

一方、彼は、話者の祖母達のかつてのピアノ教師でもあって、今はコンブレに引きこもる、極端に内気な、道徳にきびしいやもめで、話者家族が教会で出会ったり、食事に招待したり、時には、訪問したりする隣人である。彼が話者に音楽を通じて深い啓示を与えるのは遠い将来のことであって、コンブレにおいては、現実生きる人物としては、スワンと比較して、はるかに見劣りする人物である。

エルスチールはヴェルデュラン夫人のサロンの常連で、愛想はいいが軽薄な、オデットがスワンを案内した最初の日に二人をアトリエに招待することから察せられるように、アヴァンチュールの取り持ちをするのが好きな⁽³⁰⁾、画家としては全く評価されていないビッシュと名乗る人物である。下品な言葉で会話する露悪家的ビッシュ氏は、人間の肩もきちんと描けず、女性の髪はモーヴ色に彩色するようなエレガンスに欠ける低俗な絵しか描けない、と思われている。彼が独創的な画家として話者の芸術観に深い影響を与えるのは、将来の、バルベック滞在においてでしかなく、パリのブルジョワサロンに置いてみれば、上品と洗練において、スワンとは雲泥の差なのである。

ベルゴットに関しては、少年マルセルは、すでに前述のごとく、コンブレの日々で、この作家に親しんでいる。のみならず、すでに彼の作品理解はかなりの深さに達している。「私は、もはや、私の思考の表面に純粹に線的な形を描くベルゴットのある書物の特殊な断章に向きあっているのではなく、むしろ、彼の作品すべてに共通するベルゴットの《理想の断章》*morceau idéal* に向きあっている印象を持った。」 (I. p. 93) 少年マルセルはベルゴットを読みつつ、スワンが小楽節から得た

(29) 《Je connais bien quelqu'un qui s'appelle Vinteuil》 (I. p. 210) 以下。スワンは彼を「老いぼれのばか」*vieille bête* とさえ呼んでいる。

(30) 《Rien ne m'amuse comme de faire des mariages, confia-t-il, j'en ai déjà réussi beaucoup, même entre femmes!》 I. p. 199.

喜びに近い感覚を味わっている。表面に現われるものではなく、深みに息づく魂のようなものに感応している。そして、他の二人の芸術家の場合とは逆に、幻滅は賛嘆の後に来る。作品から想像した彼とスワン家の昼食で初めて紹介される現実の彼との落差に彼は深く傷つくのである (I. p. 357)。目の前の、低いかたつむり型の鼻と黒い山羊ひげの、粗野な背の低い近眼のまだ若い男は、作品が示す美からはあまりにかけ離れていた。

ベルゴットにサインを頼んであげよう、とか、娘と彼とは大の仲良しで一緒によく旅行するとか、前出の場面によって、スワンとベルゴットの親密な間柄は、すでに、コンブレで示されていたが、このスワンと作家の親交は、結婚以前、『スワンの恋』にさかのぼる。オデットの行状を暴く匿名の手紙を受け取ったスワンが差し出し人として疑う人物達のうちに、画家ビッシュと並んで、ベルゴットの名前が見えるのであるから。⁽³¹⁾ 他に一切の記述はなくとも、彼は、スワンとオデットの周辺に出没していたはずである。

スワンが第一編『スワン家のほうへ』で話者マルセルに一定の影響を与えている間、3人の芸術家は無名性と愚行のうちに沈んで、いまだ果すべき役を与えられていない。ベルゴットは例外にみえるが、彼の真の役割は、第五編『囚われの女』の、作品の永生を象徴することによって終る彼の死の場面で果たされる (III. pp. 692-693) ことを思えば、3人の芸術家は、ディレッタント、スワンの影に隠れていると言いうるのである。

スワンが話者に及ぼす力、スワンの幻惑の力、それが消滅する時こそがバトンタッチの時であるが、それは、バルベックとなるであろう。話者が現実を訪れるノルマンディーのこの土地は、コンブレで、スワンの分身たるルグランダンが語ったような、深い霧と嵐の海に閉ざされた「海の霧と亡霊の永遠の王国」(I. p. 377)ではなかったし、又、スワンが語ったような、半ばロマネスクの「ほとんどペルシャ芸術と言ってよいゴチック・ノルマン様式の教会」(I. pp. 377-378)の町でもなかった。⁽³²⁾ 《名》から出発して想像した世界は、現実の《物》を前に木端微塵にくだけさる。話者は、コンブレの、そして、スワンの呪縛を解かれて、ここに、現実の恐らく苦悩へと向う遍歴へ一步を踏み出すのである。

(31) 《Celui-ci (=Swann) soupçonna encore Bergotte, le peintre ...》I. p. 352.

(32) このペルシャ的バルベック教会の解説をして話者に新たな美意識を植えつけるのはエルスチールである (II. p. 198)。

結 び

『失われた時を求めて』の第一編『スワン家のほうへ』は、それぞれ異なる時期を物語る、3部からなる。話者内部の基層に位置する幼少期のコンブレ、話者誕生以前の過去のスワンの恋、旅行の夢と初恋に身を焦がす少年の日々。時期と場所を異にする過去が、夜中にめざめた人物＝話者によって回想される。

が、「オペラの序曲」のように、後に展開されるテーマのすべてが提出されるこの巻で最も大きな役を演じるのはスワンである。第一部『コンブレ』で地味な隣人として姿を見せたスワンが、「私」の誕生以前の過去にさかのぼって、なぜ、続く3人称体で語られる小説（と言ってよかろう）中に主人公として登場するのか。それは、まさしく、スワンが話者マルセルと同類の人物であって、スワンを描くことが、ありえたかもしれないマルセルの運命を描くことにほかならないからであろう⁽³³⁾。だが、話者ではない人物スワンの内面に隠されているものを描き出すためには、一個の客観小説の形で、三人称で、スワンの気質と行為と心理を描出する以外に手はないであろう。スワンが幼少の話者に味あわせる苦悩の先行譚の形を取り、後の話者の恋の苦悩に先例を与える形をとりながら、そこでの、重要な描線は、かつては自らを芸術家と信じたスワンの復活の可能性を示すことにある。スワンの精神の復活と愛の苦悩は密接に相関するが、苦悩が去り、愛が終ると、彼は創造への道からも遠ざかり、後のコンブレでは、《隣人スワン》として、あるいは、パリの《ジョッキー・クラブのスワン》、《オデットの夫》、《ジルベルトの父》、《ユダヤ人スワン》と様々な姿を示しながら、結局は、天職の芸術からは遠い地点で生涯を終えるのである。

しかし、話者の生涯とて、彼が最終的にゲルマント邸での啓示に従って作品執筆に向かわなければ、スワンのたどった生涯と何ら変わるところはなかったはずである。

少年時にすでに作家たらんと欲し、コンブレのブルジョワ家庭の出ながら、フォーブール・サン＝ジェルマンの最奥部にまで出入りを許され、幾たびか「目に見えない現実」の呼びかけに接し、狂おしい嫉妬にさいなまれる愛を経験する一生は、大筋で、スワンのそれと等しい。最終の啓示が無ければ、話者の生涯はスワンの一

(33) 勿論、『スワンの恋』は、幼少のマルセルの目に映るコンブレの人物・事象が、ある過去の結果であることを理解させ、それによって作品世界に一層の厚みを加える構成上の効果も一面で狙っている。『スワンの恋』と『スワン家のほうへ』の関係は、『スワン家のほうへ』と作品全体の関係と似通う点がある。

生だと言って差し支えないであろう。その意味で、スワンは確かにマルセルの先行者であった。コンブレで交差する新旧二人の芸術志願者は、一方は反対の遠ざかる道の途上にあり、他方は救済の方へと進み出すところである。遠ざかってゆく者は、進んで行く者に、自らの指針とはできなかった3人の芸術家を導き手として委ねる。かくして、「彼は栄え、私は衰える」のである。

『失われた時を求めて』は出版前年の1912年には、『こころの間歇』⁽³⁴⁾ *Les Intermittences du coeur* を総タイトルとして二巻本で出版される予定であった。『コンブレ』、『スワンの恋』、『土地の名』（現在の『スワン家のほうへ』第三部と『花咲く乙女たちの陰に』の前半）からなる第一巻は『失われた時』*Le Temps perdu* と題される。現在の第一編と同じ構成であるこの巻がスワンを主要人物にした失敗の物語とすれば、第二巻『見出された時』*Le Temps retrouvé* は、話者による成功の物語であると予想される。

貴重な呼びかけも、夢も、苦悩も、同様に忘れられていく。が、それは永久に失われたのではない。過去は完全に失われたのではないことを教えるのが「心の間歇」であった。ここに再び見出された時、再び生きられる生、それを虚無と忘却への再転落から救い出す方法は芸術作品創造をおいてない。芸術が救済をもたらすとはそういうことである。「心の間歇」から「芸術」への道筋をテーマとしたこの作品の中で、その無限の絶望的な距離を、話者マルセルに先立って、シャルル・スワンは、自ら挫折することによって、示してみせたとはいえるのである。

(2004年9月)

(34) 吉田 城、『「失われた時を求めて」草稿研究』、平凡社、1993、p. 46.